

Usefulness of cell block cytology for preoperative grading and typing of intraductal papillary mucinous neoplasms (IPMN).

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 門前, 正憲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/30810

主論文の要旨

Usefulness of cell block cytology for preoperative grading and typing of intraductal papillary mucinous neoplasms.

(膵管内乳頭粘液性腫瘍の術前診断におけるセルブロック細胞診の有用性)

東京女子医科大学 消化器内科学

(主任：立元 敬子教授)

門前 正憲

Pancreatology 第13巻 第4号 369頁～378頁(平成25年6月3日発行)に掲載

【要旨】

膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) は肉眼的に認識可能な拡張膵管内に粘液産生性の乳頭状を呈する上皮性腫瘍である。形態学的に悪性化リスクの高い主膵管型・混合型とリスクの低い分枝型がある。組織学的に胃型、腸型、膨大細胞型、胆膵型に分類され、悪性化のリスク、癌の組織型、予後が異なるため、組織学的亜型分類の診断は IPMN の治療方針の決定に有用な情報となり得る。本研究では、内視鏡的膵管造影 (ERP) 下に採取した膵液セルブロック細胞診と手術病理を比較し、膵液セルブロック細胞診の上皮異型度と組織学的亜型分類の診断精度について検討した。セルブロック細胞診による組織学的亜型分類は主膵管型・混合型では 100%、分枝型は 90% の症例で一致し、術前の組織学的型分類診断は高い確率で可能であると考えられた。しかし、上皮異型度の感度は主膵管型/混合型で 67%、分枝型で 33% と十分ではなく、膵液中の細胞をできるだけ多く採取し、小病巣からの細胞も採取できるような工夫が必要となる。セルブロック細胞診は IPMN の組織学的亜分類をよく反映し、上皮異型度診断は補助的な役割ではあるものの、IPMN の治療方針決定には有用である。